

アレイオス主義における神論と救済論についての一考察

大橋 仁夫

序

本論で扱うアレイオス主義論争は、そもそも四世紀初頭に生じたものである¹⁾。

この論争の発端の状況及びアレイオスの生い立ちについての史料は乏しいが、オーピッツ(H. G. Opitz)が比較的コンセンサスを得ることができると説明を提示している。それは、アレイオスの同僚の聖職者がアレクサンドレイアの主教アレクサンドロスに、アレイオスの父—子に関する教説について訴えたことを発端とするもので、教会会議においてアレクサンドロスはアレイオスにその教説を撤回することを要求したが、彼はそれを拒否し、それによりアレイオスは破門されるに到った。その後、復権をめぐる論争は激化した。アレイオスは三二五年にニカイアにて開かれた公会議において断罪されたが、危機的状况は継続し、政治的な逆転も生じ、ゲルマン民族に伝播するなど拡大もした。しかし三八一年のコンスタンティノポリスにおける公会議後の次々に発布されたテオドシウス帝の勅令と正統派教

父の活動によりアレイオス主義は下火となり、歴史の表舞台から姿を消していくことになるのである。

あらゆる異端研究同様、アレイオスは現代において再び注目されるようになっていく。かつて救済論を何ら持たない異教哲学として扱われてきたアレイオス主義については、神論から救済論を導き出した一九八一年のグレッグ—グロー(Gregg and Gloor)の共同研究業績が評価され、それを契機として一九八〇年代はアレイオス主義研究が最も盛んな時期であった。ハンソン(R. P. C. Hanson)もまた一連の研究史について「アレイオスの問題の研究は、過去百年にわたって標的を撃とうと試みる射程の長い銃のようなものであった。最初の弾は標的を遠く外れていたが、やがて標的の近くに当たるようになった」と評しており、アレイオス主義について偏見のない分析と議論が行われるようになったことを指摘している。

アレイオスの目的は、唯一神教の擁護である。それは多神教に対する意味でのものではない。アレイオス主義においては、唯一神か、三一神かという、二者択一に直面した場合、常に唯一神であると信仰告白していく意味での唯一神教擁護である。本論ではそれを明らかにすると同時に彼の救済観について考察していきたい。

第一章 文獻の問題

アレイオス主義研究の困難さは、アレイオス及びルキアノスに関する史料の乏しさに由来するものであるが、アレイオスに關しては三通の書簡しか我々に残されて⁵³いない。それらは内容の上でも三種類に分類され得る。

(一)、ニコメディアのエウセビオスへの手紙は「子」についてのアレイオスの考えを提示するものである。

(二)、アレクサンドレイアのアレクサンドロスへの手紙は「父と子」についての内容を扱っている。

(三)、コンスタンティヌス帝への手紙の内容は、「神」を前面に押し出している。

また、論敵の著作の中に現れているアレイオスの発言についての信頼性は、研究者によって全く異なっている。

一 タレイアについて

アレイオスが自説を民間に流布させるために作成したと言われるタレイアは、『アレイオス派駁論Ⅰ』第五章に七行、および『アルミヌムとセレウキアの會議について』第十五章に四十二行残されている。これについての関心はアタナシオスが言及している Ζωδόγος との関係であり、韻律研究が主体であったが、ウェスト (M. L. West) が一九八二年「アリウスのタレイアの韻律」(‘The Metre of Arius’ Thalia) と結論づけたところ

よれば、アレイオスに影響を与えた手法をもとめる条件は、(一)駁論と『アルミヌムとセレウキアの教會會議』(以降『教會會議』(De Synodo))の両方に一致すること、(二)文法的にテキストにおける休止の明らかなパターンの一致、(三)史的並行、(四)そのような作詩法による工夫と不規則が帝政期の韻律の典型であったことが推論されることの四点であるとし、それまでの見解がいずれもその条件を満たさなかったことを批判している。⁵⁴ Westによれば韻律はイオニアの四歩格であり、Ζωδόγοςのものに非常に類似するものである。そして Ζωδόγος の詩が下品な種の娯楽に用いられたことが確かである一方、倫理的な詩を含む、真摯な韻文にも用いられたことを指摘し、結論としてアレイオスが故意に民衆的な宣傳方法を用いて彼の教説を魅力的な形式にしたと述べている。⁵⁵

これと同時に、カネンギーサー (C. Kannengiesser) が、駁論のものについてはアレイオスの思想を知る史料として使用できるが、『教會會議』のタレイアについてはアタナシオスが『教會會議』を書く以前に作られたオリジナルのタレイアの改訂版であると主張している。彼は駁論Ⅰの第一章から十章までの内容が、続く章で扱われているアステリオス駁論の内容と一致しないことから、三五〇年頃からの付加であるとして、そこにおいて引用されているタレイアの作者については新アレイオス主義の立場に移行しつつある人物であると考え、これを批判したのがステッド (G. C. Stead) である。⁵⁶ 彼は一九九四年、「現

代研究におけるアレイオス」(Arius in Modern Research)において駁論Ⅰがアタナシオス二度目の追放期に現れたものだとすれば、アレクサンドレイアの状況を念頭においてアレイオスを批判対象とするのは当然であり、その後ローマにアステリオス神学が活発に論じられていたことから、アタナシオスの標的の変更は不自然ではないことを説明する。そしてステッドは全体的に、タレイアはあまり手を加えられていない状態で引用されていると考えている。そしてアタナシオスが自身の批判を展開する箇所だけ引用したことを考え合わせ、両者に一致する箇所、正統派の論拠が反駁し得ない箇所が削除されたことを想定し、オリジナルのテキストは百行以上五百行以下程度であったことを推論している。

二 『回勅書簡』の著者について

Stead は一九八八年の論文「アタナシオスの最初期の著作」(Athanasius' Earliest Written Work)において、一八四四年にメーラー(J. A. Mohler)が『回勅書簡』の著者をアタナシオスとしていることを冒頭に述べ、それ以来ニューマン(J. H. Newman)及びロバートソン(A. Robertson)の両名を除いて、ほとんど注意が払われていないことを訴えている。そしてこの書簡がアタナシオスの最初期の著作であることの論証を試みている。

ステッドは全体の概観、構成の分析、シラブル研究等を経た

後、確実にアレクサンドロスのものだとされるテサロニケのアレクサンドロス宛書簡との比較を試みている。その結果、テサロニケ宛の書簡においては、確実にアタナシオスのものとされる著作の中には現れない語彙が三六語も確認されたのに対し、『回勅書簡』では七語前後しか数えられていない。それらは *εὐφραδίας*、*συνακορῶναι*、*βίαι*、*ἀριθμῶς*、*χριστομαχεῖν*、*ἐφερκεῖν* であって、そのうち *εὐφραδίας*、*ἀριθμῶς*、*χριστομαχεῖν*、*ἐφερκεῖν* は派生語の形でアタナシオスの用語に現れているとしている。また内容的にも一致する箇所が多く、Stead は『回勅書簡』はアタナシオスがアレクサンドロスの要請をうけて、草稿を書き上げたものであると結論づけている。

以上のように考察すると、『回勅書簡』はアタナシオスのアレイオスに対する反駁として扱い、タレイアについては多少の手が加えられていることを考慮しつつも、『駁論Ⅰ』及び『教会会議』の両者に引用されているタレイアは双方ともにアレイオス自身に遡り得るのである。

第二章 アレイオスの神観

前述のようにコンスタンティヌス帝への書簡において、唯一神への自身の信仰を、アレイオスは強く訴えている。しかしこれは、ローマ皇帝への書簡という性格上、神学的には希薄な内

容であつて、厳密な神観はアレクサンドレイアのアレクサンドロスへの手紙及びタレイアから読みとることになる。

神について、アレイオスはタレイアにおいて「神ご自身は、まったく、すべての者に言い表しがなく臨在しておられるのである」と述べている。アレイオスが強く主張する神の属性は、「生まれざる者」⁽¹⁾「太初なき者」⁽²⁾というものである。また捕囚期以降のユダヤ教的「知恵」との問題に絡んで「(神は)知恵ある方である、彼こそ知の教師であるから」⁽³⁾「知恵は、知恵ある神の意志によつて、知恵として存する」⁽⁴⁾とも叙述している。一方、父なる神としては、子との比較上、「太初なき者は、子を、生じたもののはじめとして立てられた。そしてこの者を、自らに対して、生むことによつて、子へと為した」⁽⁵⁾「子が存在しない時でも、父なる神が存在する」⁽⁶⁾と述べている。このような厳格な、神の唯一性の主張から、第二次大戦前から戦後にかけての研究者们によつて、アレイオスは哲学的唯一神を想定した異教哲学者として非難されていたのであったが、他方アレクサンドロス宛の書簡における神観からは、彼がユダヤ教的人格神を強く意識していたことが明瞭となる。そこでは「律法と預言者、かつ新しい契約の神」⁽⁷⁾と述べられている。新しい契約を結ぶ神とは、アレイオスの立場から見れば、無論旧約の神に他ならない。その意味で、例えばグレッグ・グローはアレイオス主義における神をストア的無感情(*oologos*)であるとしているが、それについては人格神ということに照らし合わせた場合、疑問が生じるの

である。

それでは「子」とはどのような存在なのか、アレイオスは次のように述べている。

「子により仲介された者にとつても、また子自らにとつても、神は見えざる方である(が)私ははっきりと言おう、いかにして見えざる者が子によつて見られるかを、神が見うるどころの力で、また独自のものさしで、子は父を見ることに耐えている、許されている限りで」⁽⁸⁾。

「父は本質上、子とは異なる、というのは太初なき存在であるから」⁽⁹⁾。

一方、論敵のアタナシオスもアレイオス主義の養子的性格に反駁する過程で、彼の想定する父―子関係が事実上、永遠性を共にするものなどではない父―子関係であることを露呈している。彼は父―子関係を、「アブラハムとイサク」⁽¹⁰⁾の関係と同様であると言明しているのである。彼の主張からすれば、「アブラハムとその子孫」と言うべきところをイサクと断言しているのは、その犠牲的性格を強調するためであろう。しかし同時にアタナシオスは父―子関係を「真の御子―ヤコブからのヨセフのように」⁽¹¹⁾とまで述べているのである。アブラハムのみならず、*genovo-jos, ptojs-jos*の問題を暗に提起していると反論され得ようが、後者の場合、この問題が現れることはない。このような血族的な父―子関係ではあるが、それでもひとつの見解として、同一本質の教義の構築は可能であるように思わ

れる。というのは、本質 (ousia) において同一 (ous) である可能性が残るからである。しかし、この言明からすれば、彼の主張する共永遠性 (永遠性を共にすること) は成立しなくないと考えられるのである。

したがって、ステッドが「アレイオスのアレクサンドロスとアタナシオスとの相違は以下に示されよう。後者は神学上、また信仰上、十全な、子のための場を与えるため、彼ら (アレイオス派) の (アタナシオス達から見一見そう思われるところの) 哲学的二元論を害する用意ができている。アレイオスは彼の基本的な二元論を完全に保ったまま、その場を作ろうと最善をつくしている」と述べていることは妥当であろう。アレイオスは唯一神教を護持しようと努めると同時に、教会史的にも、現代に到るまでそうであるべきであったと考えられる、神―中介者―救世主の構造を保持しようとしたのである。しかしこれはステッドが述べるように二元的ではない。なぜならアレイオスは「すなわち三があるのだ、等しい栄光におけるものではない」と述べているからである。アレイオスが同門の司教に送った書簡の中で、子を神であると、ごく簡潔に書きながら、敵対するアレクサンドロスに対して子の被造性について一歩も譲らなかつたことは、理解され得るものであって、彼が欲したこと、イテモテ二章五節にあるような、子の中介的位置を論敵が理解することであつたのである。

第三章 アレイオスの救済観あるいは終末観

アレイオスの救済観は、次のことからネガティブであると言える。すなわち、彼は神を裁きの神―それ自体ユダヤ教への逆行といえる―と見なしているからである。その信仰告白において、彼は神について「主宰者、万物の審判者、統治者、管理者」と述べている。すなわち神は歴史の主宰者であり、この世を統治・管理するものであり、裁き手なのである。

アレイオス主義研究が一九八〇年代に最盛期を迎えた大きな要因のひとつがグレッグ・グロー (Gregg and Groh) の共同研究の成果であるが、かれらはローマ八章二九節 *eis to elenai oirov peritokou en nomois dekalogis* (彼を多くの兄弟の中で長子にするため) に注目して、アレイオス主義による救済論の構築を試みている。グレッグ・グローはストア派の影響について主張するが、それは基本的に子の可変性 (*peritokos kai dMoirotis*) に基づく。この可変性は、聖書においては子の知覚の限定性から論理的に導き出されている。この知覚の限定性は、子の神に対する忠実、ヘブライ三章二節「モーセが神の全体の中で忠実であつたように、イエスは、ご自身を立てた方に忠実であられました」に見られる *hobos* を問題とする。

グレッグ・グローの見るところでは、*hobos* は従順に通ずる。子の可変性から、意志としては神、主権を有する者の意志へと結び付けられる自由意志となる。無論、このような定式化

も、先述同様に何ら保証が与えられるものではない。同時に結論部分の欠落、つまり倫理的努力、従順に対する回答として恩寵によって (*kat' xáriti*) θεός になると説明しているのであるが、それではこの θεός とは一体どのような状態であるのか、グレッグ・グローは説明していない。

またグレッグ・グローはストア的性格の論証のため、必然的に「神」を無感情なものとして扱わなければならないが、アレイオスが超越性を訴える神は、真に無感情であらうか。アレイオスが「律法と預言者、新しい契約の神」と言うとき、それは旧約の人格神を指すと考えられる。アレイオス主義が聖書の唯一神教の擁護を目的としているといわれるとき、唯一神というのは決して無味乾燥な、不可知であるとして適当な名称をつけて解決し得るものではない。むしろ哲学的唯一神ではなくて、聖書の唯一神という立場を認めるならば、アレイオスが父—子との間に明確な境界線を引いた理由はここにあると思われる。

アレイオス主義に関して諸研究者が「救済」の語を用いるときは、むしろアレイオスが、論争を経て抱くようになったニヒリズムの可能性を常に考慮しなければならないように思われる。アレクサンドロス宛の書簡の内容が、全く敵対的ではなく逆に相手の理解を求める態度をとっていたのに対して、後に彼の論調が激しくなり、(教会会議開催前等において)党派を形成していくような行動をとるようになったことは、それを如実に表している。

現代においても研究者が批判しているのは、アレイオスの思想のユダヤ主義的な神観であって、アレイオス主義において何が敬遠されているか、それは「太初のない神の被造物性」であるとグレッグ・グローは述べる³³。確かに被造物の視点からすれば、この属性、あるいは「頂点から始まって、子の産出、被造物の子の神への関係、残りの被造的秩序に向けられる考慮³⁴」が気に入らないのは理解し得るが、逆に我々に都合の良い説明を構築し、安易な救済観によって救われたと考えていることの方が危険であり、その意味で、アレイオスは神、一つなる存在というものを非常に厳しい眼差しで捉えているのである。

結論

本論で扱ったアレイオスの神論と救済論は、聖書の唯一神に見られる「人格」、歴史に作用する人格神ということに基づいていると思われる。それ故、その神論においては父—子の区分が全面的に問題となつていたのである。

アレイオスの救済論についてはグレッグ・グローはローマ八章二九節³⁵及びヘブライ二章一〇—一節等に基づき、救済論を明らかにしようとしており、倫理的努力により恩寵をうけて θεός になるという構造は、グレッグ・グローがアレイオスの神観と聖書の引用をもとに論理的に構築したものと述べることで、それは(正統派の救済論同様)なんら保証を与えられ

るものではないけれども、そこにおいて徳に注目したこと等は評価されるべきである。

三位一体論は組織としての教會的要求に応える教義であるが、その妥当性は疑わしい。結論としては、アレイオス主義研究は引き続き、当時この問題を表舞台から立ち消えに到らせた主因を、教會會議およびローマ帝国の政治的見地に立つて考察しなければならぬのである。

その結果、我々は「勅令によつて」アレイオス主義者が強制的に「追放」された教會に次々と正統派の教師が入つていくという、そのような形で正統派の凱歌が揚げられている状況を直視することになるであらう。そしてその原因となつた「勅令」とは、ローマ帝国の政治的統一という要求から発布されたものであつたと結論づけることができるように思われる。しかしより長期的な展望からすればヨーロッパ世界における歴史的動力として、そのような教義の統一は必然的であつたことも考慮できることを付け加えたい。

ユダヤ教、イスラム教がキリスト教と教義的に衝突に到るのは、まさにこの論争で扱われている点である。アレイオス派が「異端」となつたのは彼らがユダヤ教ではなくキリスト教であらうとしたためであつた。今日においても、それは変わらない事実なのである。

註

- (1) アレイオスは二五六年頃ビテュニアに生まれたものと考へられている。
- (2) H. G. Opitz, Die Zeitfolge des arianischen Streites von den Anfängen bis zum Jahr 328, Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft und die Kunde der älteren Kirche 33 (1934), S.131ff.
- (3) キリスト教徒とゲルマン人との間に生まれたゴート人司教ウルフィラ (ca.311-ca.383) の宣教。彼はギリシア語聖書をゴート語に翻訳した。彼は「神」についてギリシア語の θεός を退け、後にドイツ語の Gott、英語の god となるゲルマン語の gud (= guth、ゲルマン族長の諮問する相手を指す語、中性名詞を男性の神格に採用) を適用した。
- (4) R. P. C. Hanson, *The Search for the Christian Doctrine of God*, Edinburgh, 1988, p.95.
- (5) (i) ニコマデシア司教エウセビオス宛の書簡 (ca.318)。 (ii) アレクサンドレイアのアレクサンドロス宛の書簡 (信仰告白, ca.320)。 (iii) エウノイオスとともに、皇帝コンスタンティヌス宛の書簡 (ca.327 or 334)。それぞれ Urkunden zur Geschichte des arianischen Streites (= Urk.), Berlin und Leipzig 1934/35, I, 6, 30 以下。
- (6) M. L. West, 'The Metre of Arius' *Thalia* in: *JThS NS* 33 (1982), p.98.

- (7) Ibid., pp.98f.
- (8) G. C. Stead, 'Arius in Modern Research', in: *JThS NS* 45 (1994), p.28.
- (9) Ibid., p.29.
- (10) 『回教書簡』(Urk. 4b, ca.319)『アノタサニシムノアの
アノタサニシロスツル』テサロニケのアレクサニシロス冠
書簡』(Urk. 14, ca.324)°
- (11) Stead, 'Athanasius' Earliest Written Work', in: *JThS*
NS 39(1988), p.76.
- (12) Ibid., pp.78-91.
- (13) Αυτός γούν ὁ θεός καθό ἐστιν, ἄφρητος ἅπανιν
ὕπαρχει.
- (14) ἀγέννητος.
- (15) ὁ ἀναρχος.
- (16) Σαφές δ' ἐστιν ὁ θεός, ὅτι τῆς σοφίας διδάσ-καλος αὐτός.
- (17) Ἡ σοφία σοφία ὑπῆρξε σοφοῦ θεοῦ θελήσει.
- (18) Ἀρχὴν τὸν υἱὸν ἔθηκε τῶν γεννητῶν ὁ ἀναρχος,
καὶ ἦν γενκεν εἰς υἱὸν ἐαυτοῦ τόνδε τεκνοποίησας.
- (19) Αὐτίκα γούν, υἱοῦ μὴ ὄντος ὁ πατὴρ θεός ἐστι.
- (20) νόμου καὶ προφητῶν καὶ καινῆς διαθήκης θεόν.
- (21) Gregg and Groh, *Early Arianism*, London, 1981, p.17.
- (22) シュンネーローダ『ヌム派は必ず無知と苦しみと
を認めた』アノイオスが救済者を
σοφόςと認めていなかった可能性を推論している。グレ
グーローはアノイオスが古代ギリシアではなく、帝政
ローマ期のストア派から影響を受けたことを論じている。
(22) πηγάς δὲ λέξω πῶς τῷ υἱῷ ὁπαὶ ὁ ἀόρατος.
τῇ δύναμει τῇ δύνατ ὁ θεός ἰδεῖν ἰδοις ... τε μέτροις
ὕπομένει ὁ υἱὸς ἰδεῖν ... τὸν πατέρα, ὡς θεῶς ἐστιν.
(23) Εἶνος τοῦ υἱοῦ κατ' οὐσίαν ὁ πατὴρ ὅτι ἀναρχος·
ὕπαρχει.
(24) *De Decriis*, 6, καθ' ἣν Ἰσακ καὶ οἱ Ἀπαύμ ἐστιν υἱός,
καὶ ὁ Ἰακὼβ τοῦ Ἰσάκ, καὶ οἱ πατριάρχαι τοῦ Ἰακὼβ.
(25) *Or. c. Ar.* 1. 37, καὶ Ἰακὼβ τῷ Ἰακὼβ,
(26) G. C. Stead, 'Platonism of Arius', in: *JThS NS* 15
(1964), p.23.
(27) Ἦγουν πρὶς ἐστιν ... δόξαις οὐχ ὁμοίαις.
(28) Urk. 1. 4, πλήρης θεός 「満ち溢る神」°
(29) Urk. 6. 2. κρίσιμα τοῦ θεοῦ τέλειον. 神はアノイオスに
タノイオスに對して ὑπῆρξεν τὸν υἱὸν ἔθηκε τῶν γεννητῶν ὁ
ἀναρχος, καὶ ἦν γενκεν εἰς υἱὸν ἐαυτοῦ τόνδε τεκνοποίησας
νὰ τῷ τῶν ἀνδρῶν τῶν βιβλικῶν 「この文句は切り離
された神性な事柄に因って触れてくるものな」二重の描写を
示す二つの事柄に触れたのである。ロマンシ (R.
Lorenz) は最初の行は子の設けを示し、二行目は続いて生
ずる養子の行為について言及していると考えている。しか

る。

- しこの解釈はアレイオスのアレクサンドロスへの手紙六・三における一節によつてすぐに矛盾する。御子は生命と存在と栄光とを父から受けたのである。 τὸς δόξας συνυποστήσαντος ἀντὶ τοῦ πατρὸς (父が彼を同時に実在せられたので)。論するまでもなく神学者は(この点に関して)一致していない。しかしながら私は、注意深く言い表された教義に関する文書におけるこの決定的な点で、アレイオスが自家撞着に陥ったということについては疑わしう」(述べている) (Arius in Modern Research, pp.33f.)

- (30) Urk. 6. 2. μόνον θυνάσσειν, πάντων κρείττην, διοικητήν, οἰκονόμον...
- (31) Gregg and Groh, Early Arianism — A View of Salvation —, London, 1981, p.16.
- (32) Urk. 4b. 8.
- (33) Or. c. Ar. I. 5.
- (34) Gregg and Groh, op. cit., p.77.
- (35) Ibid.
- (36) Ταπεινὸν καὶ τὸ ἴσον μὲν τοῦ υἱοῦ γεννᾶν θυνάσας ἔσται ὁ κρείττων. διαφορώτερον δ' ἢ κρείττονα, ἢ μεῖζονα, οὐκ. (一)かしくに等しいものを、より強き方はもうけることができる。しかしよりすばらしく、より強くより偉大なものは(もうけることは)できない」と述べられていることは、この引用箇所によるものであると思われる。